

Title	第十九世紀の文明史及び文明史家 (下)
Sub Title	
Author	間崎, 万里
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.10 (1920. 10) ,p.1457(119)- 1470(132)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19201001-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の傾向があつた。ソロルド・ロヂァースは貨幣の歴史的研究を爲したが其の承繼者は極めて尠く同一程度の勞働に關する研究は皆無であつた。

ステッフェン(Steffen)の著作は構成的若しくは暗示的なものを立證せず、過ぐる世界戦争の勃發前に方つて「黒死病」以來の英國に於ける貨幣の制限を主題として英獨の雜誌に數篇の論文が現れて、是等は可成り此の問題に關しロヂァースの結論を修正したが而も今日まで論據を顛すまでに達しない。之を要するに歴史派經濟學者と全然區別さるゝ經濟史家は尙ほ未だ「生産」に専ら興味を有して居る。屢々彼等は生産の要素、——純正の土地、勞働、資本及び監理を取扱ふが、而も彼等の専ら與かる所は農業、工業及び商業の如き生産の過程に關してであつた、而して是等の問題を取扱ふ上に於ても第十八世紀以來殆ど何等の進歩もなかつた。

加之生産の過程の研究も亦不完全である。集

合的生産、經濟的教養(農業以外の)及び貯藏若しくは時間的効用の生産は一般に無視せられ、最上の場合に於ても僅に軽く取扱はれたるに過ぎない。今や貯藏は商業の三區分の一にして、其の他の二區分とは貨物の運輸と交換とである而して此の二作用は近世の状態では貯藏若しくは倉庫の充分に發達せる制度なしには大なる範圍に行はれ得ないのである。又吾人は之無くしては農業も工業も行ひ得ないのである。蓋し貯藏の無視は恐らくはこの種の生産に對する中世的態度の殘留である。當時貯藏は無視せられたのみならず罪されたのである。然し近時の發達は吾人に此作用を觀取せしむるに至つたが殊に吾人が市府の倉庫が大なる市場企業のコルネとなり、地方の穀物倉庫が地方物産の販賣のみならず外部からの供給物を購入するの機關となれる

を見れば明かである。(以下次號)

第十九世紀の文明史 及び文明史家 (下)

間 崎 万 里

二

リールやフライタハやブルクハルトが、文明史を時好に投せしむるに及んで、他の作家達も彼等の研究法を一變して新なる領土に着眼するに至つたやうである。グリムとランケに師事して双方より愛寵せられた、ヴィルヘルム・アーンルトは、社會の發展上に於ける法律と經濟の地位の重んずべきことを説き、フリードレンダーは一八六一年に羅馬帝國の文明について無双の活畫を出版し、忽にしてレッキの合理主義及

び道德史に關する諸著が相次いで顯はれた。更に又ダレゴロフイウスの『中世期に於ける羅馬市』、サイモンズの『伊太利に於ける文藝復興』、ダル教授の羅馬の社會に關する著述などが、歴史の概念を豊富にした。知力發展の論述に對しても、ロッシヤとギエルケ、レズリ、スチーヴンとモーレー卿、ハイムとユスチ、ゲオルグ・プランデスとクノー・フィッシャーによつて貴重なる貢獻がなされた。歴史の研究法を經濟の研究に取入れしことは、社會史に興味を向くこととなつた。ハラムは曾て中世イギリスの村落生活を知り得ざるを遺憾としたのであつたが、ソロルド・ロージャースの研究はイギリス農村の歴史に基礎を作り、カンニンガムはイギリスの經濟的發展を初めて包括的に通査せる書物を書いた。ルヴァシュールは佛蘭西の勞働者階級の運命の研究に長き一生を捧げ、ニッチは伯林大學に於て

獨逸人民の社會史を講じ、イナマシュテルネックは初めて學究的なる獨逸經濟史を著した。コヴァレフスキーは羅馬帝國の滅亡にまで溯つて所有權の問題を研究した。シュモーター自身が、シュトラスブルヒの織物業についてなせる初期の研究を以て、其の模範と仰げるシュモーター學派は至高の價值ある叢書を刊行して、各國の實狀を明にした。實に經濟的現象が、國家及び社會の生活と密接不離の關係にあることを、この伯林大學の老教授ほど盛に力説せるものは他に求められない。

文明史は、第十九世紀の中葉に於ける、科學的の發見と概括の影響を受けて、著述せる人々の一團によつて、熱心に研究せられた。コントの狹隘なる歴史的知识は、其の發展論の價値を減じたるも、彼の三階段の法則は、暗示に富める有益なる假説であつた。バックルの未完の著

述は、事件の原因と關係に考慮を促せる點と、自然の條件の持續的なる影響を力説せる點とに於て、非常に役立つた。同時に又イギリスとスコットランド、佛蘭西と西班牙に於ける、知力の發展を描寫せる彼の彩筆は、最も興味多き歴史文學中の一であつた。バックルの抱負は、文明史を編纂物より脱して正確科學に近きものとし、之を政治と文化の廣大無邊なる全範圍より比較、歸納せる確實なる基礎の上に置かんとするにあつた。進歩とは増し行く知識の歸結なりてふ彼の命題は、峻烈なる論難攻撃を蒙つた。彼は當代の獨斷説を脱し得なかつたとはいへ、其の著書は全世界の讀書界に一新時期を劃さしめ、過去を社會學的に研究することに洪大なる刺戟を與へた。旅行家として將た地理學者として著名であつた、ヘルツェルトが、一八七四年に、『自然の發展より觀たる文明史』を編纂したるは、等

しく自然科學的思想の代表者としてあつた。彼は『超自然的の力が文明の現象を説明するに必要であるか否かを考査せんとし』て、其の必要なことの結論に達し、文化の發展は人種と地理と氣候とによつて制約せられてゐる自然的過程であると述べ、文明とは自然を支配すること、人間を馴致することとを意味するのであつて、道徳の發達を意味するのではない。生存競争は史的生活の全行程を支配してゐると。本書の特色は、自然が立憲君主としてではなく、獨裁君主として威力を揮へる、野蠻なる先史時代の人を取扱へる部分である。彼の世界史に關する知識は、狹隘であり、其の調子は論戰的であり、其の哲理は淺薄であつたけれども、其書は廣く一般の人氣を博した。其の死後に出でた第四版は、専門家の改訂を經、且つ澤山の插畫を加へてある。彼の見地は、瑞西の聖ガルの該

博なる記録保管係ヘン・アン・リンによつて、勿論左程論戰的ではないが、踏襲されてゐる。そして彼は其の自國の文明と獨逸の文明とを世界の文明の研究に四十年を捧げた。ヘルモルトは、協同的の名著『人類の歴史』を編纂して、自然と地理の主權者の勢力を力説した。原始的文明は又歴史の研究範圍に取り入れられた。ブーシェー・ド・ベルト、ピットリッヴァース及びその後繼者達の發見は、人事の活動の發端を數千年の昔に引き戻した。タイラーとマックレンナン、マンハルトとテオダー・ヴァイツ、ラッテュルとバッシュアン、フレージャーとウエスターマークの手によつて、人類學は科學とせられ、吾人の祖先の習慣と信仰は明かにされた。メーンは該博なる知識を傾けて、古代法の解釋に従事した。

曾て一人の作者によつて人文の發達に捧げられた抱負の最も大なる著述は全くかけ離れた別

派の代表者である、ローランのそれである。彼の主著は一八五〇年に出版を初めた。このガン大學の教授は、人間の全史を通査し、各冊には各政治と文化の表を掲げ、特殊の注意が自由と正義に向つての人文の進歩を、或は助け或は妨ぐる宗教と人と事件に對して拂はれた。本書は其の興行の廣汎なること、其の熱心と暗示に富めることに於て、インプレッシーヴである。

『歴史の哲學』と題せる最後の一卷は、其の著述を概括し且つ其の教訓を拔萃してゐる。ローランはボッシュューと共に歴史は辯論論であると確く信じ、神の計畫の中に於ける變化と運動の意義を捕捉せんとし、且つ人間が益々神の計畫を恐るゝことの證據を求めた。

文明史に對する人氣の高まると共に、其の特質と價值についての長期の論争が起つた。就中最も興味を起させたのは、ゴータインとシェー

ファー間の論戦と、ランプレヒトの『獨逸史』より起れるものである。かのハンザ同盟の研究を以て名高きデートリヒ・シェーファーは、一八八八年のチュービンゲン大學に於ける就任式の講義に於て述べて曰く、もし歴史が統一と科學的性質とを有すべきものであるならば、それは國家に對して集中されねばならぬ。民主的なる現代に於て多數の作家は發展の樞軸を民衆に於て見出し、至高なる人性の表現よりも寧ろ民衆の習慣と境遇とを研究し且つ大冊が中世の家屋といふが如き些事に捧げられてゐる。然るに今や生氣を賦與する呼吸（之なくば歴史は死せる知識の大量となる）は、常に國家より發せなければならぬとを再説すべきの時である。文藝復興と雖も概して政治的であり、そしてその代表的人物はマキアヴェリであつた。宗教改革は國民的意識を興へた、そしてルーターは神授的なる國家の

起源を主張した。『史家の任務は國家の起源と任務、並にその生活條件を理解させるにある。』史家にして、もし宗教又は法律の領域、文學又は藝術の領域に踏み込みたらば、彼は側道を歩めることを知らねばならぬと。

かく傳統的なる政治的見地を、頑として主張せることは、最も有爲なる獨逸の青年文明史家の應戦を見るに至つた。ゴータインは、曾遊の地なる南伊太利の文明を研究して世の注意を引き、ロヨラ及び反宗教改革についての廣汎なる研究によつて其の名聲を加へた。彼は曰ふ、發達し行く科學は其の範圍について何等の懸念すべき限界を必要としなかつた。國家は人間の聯合せる一つの形式に過ぎなかつた。それは恐らく最大のものであつたであらう、併しすべては必須的のものであつた。史的生活の個々の方面、即ち國家や宗教や藝術や法律や經濟などは、其

等が相集つて作るべきより高き統一を、即ち其等をその四肢とせる團體を必要とし、且つ之を豫想するものである。シェーファーは、恰も文明をば生活の物質的條件のみを取扱ふものなるかの如くに論じてゐると。彼はフライタハが單一なる生活と民族生活との關係についての大なる秘密に最も接近し、そして彼の記せるルーターとフリードリヒとは、矮林中の巨木なるかの如くに聳え立つてゐると宣言して、文明史が個人を閑却してゐるといふ主張を反駁し、文明史は國家を矮小にしてふ批評に對しては、人間の發展の危急なる時機の多くに於て、鍵鑰は政治の限界の外に見出さるべきを以てした。コ帝時代に於ける重大なる事件は、異教より基督教への内的推移であつた。文藝復興と宗教改革並に反宗教改革にあつては、思想は古代の鑄型を振蕩して世界の表面を一變した。斯の如き時期に於

て文明史家のみが、政治の渾沌よりして秩序を整へ得るの地位にある。プロイセンの隆盛は元來政治的問題であつた、併し斯の如き異例は稀である。事件は力の所産である。そして方は思想の産兒である。シェーファーの之に對する應答はこの論争を終結とした。彼は歴史が生活のすべての局面を示し、且つ之を網羅するものなる事を認めしたが、併し如何なる人の精神も全局を包擁し得ないことを説き、ランケと其他すべての大歴史家が、其の視力を國家の上に集中したることを主張し、或る時期が殆ど全く教化的であるといふ論點を攻撃した。彼は曰ふ、ルーターは國民的感情の後援なくば決して成功しなかつたであらう。反宗教改革はメキシコ及びペルーの財寶なくば、その人氣ある成功を決して收め得なかつたであらうと。何れの論者も相手方を論服せしむる事を得なかつた、そして各

自は各の最も興味ある問題について勞作を續けた。史家の任務の廣汎なることを説けるゴータインの能辯は深甚なる印象を與へ、政治史學派を擴充するの助となつたのみか、又文明史の闘士にその重任を思はしむるの效果があつた。ランプレヒトの『獨逸史』の出版よりして起つた論戰は、更に激烈であり且つ長引いたのであつた。ランプレヒトはモーゼル河及び中部ライン河流域に於ける中世の經濟生活に關する廣汎なる著書によつて名聲を博した。獨逸の一地方に對する根本資料を、今迄になく最も多く蒐集したる彼の努力は、一般に承認せられたが、併しその使用については峻烈なる非難を蒙つた。ペローは、彼の研究法は專斷であり、彼の組織は氣まぐれであると言ひ、ギエルケは彼の法律的理解は明瞭を缺いてゐると嘆じ、シュモラーは、本書が餘りに火急に出版せられ、思想上に朦

朧たる點があつて讀み辛いと難じた。問題の『獨逸史』は一八九一年に出版を初めた。そしてこれには著者の目的を示すべき序文がなかつた。併し僅か斗りの緒言が、三年後に出た第一巻の再版に附加せられた。彼は純粹の政治史家が、ランケと共に「事象の實狀」*Wie ist es eigentlich gewesen?*を研究してゐることを述べ、彼は「その成生」*Wie ist es eigentlich geworden?*を明にせんことを欲した。事件の起源となれる物質的並に知的事情の總體の通査を必要とする發生的方法が敘述的方法に代へられねばならぬ。科學的時代に住める歴史家は、因果の關係を取調べねばならぬと。本書の政治的部分に於ては、彼は根本的研究を少しも主張しなかつたが、社會組織の通査と文化の評論は、全く彼れ獨特の天地であつた。本書の主たる目的は、獨逸的意識の發展を求むるにあつた。彼は國民的なる民族

精神が、外部の勢力の影響を受くべきも、内在的法則に従つて發展したることを信じてゐた。彼はビテアスに筆を起して、當代と現代との間に於ける自然の相違を寫し、人類學と言語學は之れに貢獻する所があつた。併し彼の寫せる原始的獨逸人の生活は、アーノルトの如き巨匠の生彩あるに比して見劣がする。ケーザー及びザルスの記事を以て始まる政治的敘述は、技巧を凝せるにも拘らず、活氣なく色彩に乏しい。カール大帝は、最初に出遭ふ具體的の人物であるが、彼は濃潤たる霸氣に乏しい。條件の歴史が個人の歴史に代つて居り、文化が政治よりも優位を占めて居る。第十世紀の二人の治者、即ち『帝國の眞の建設者』であつて且つ諸市の保護者であつたハインリヒ捕鳥者と、希臘婦人を母とせる短命のオットー三世とは、彼の興味を惹いた。皇帝ハインリヒ四世と法王グレゴリウス

七世との間の確執に於て、彼は法王中の最も傑出せる人物の雄大を殆ど意識しなかつたやうである。第三卷は第十一世紀に於ける諸市と其の政治的勢力についての價値ある通査を以て初まつてゐる。カール大帝以後の偉傑、バルバロッサの人格は、小説的英傑なるかの如くに之を數行の中に論じ去り、中世に最も名高きフリードリヒ二世は、影の如くに何時の間にか消え去つてゐる。ホーエンシュタウフン家の滅亡後、大政治家を見ざりし事が、この史家の短所を餘り目立たしめないが、併し彼の特有の文明史の範圍内に於ても、常に満足すべきものとはいへない。彼は第十四世紀の光明である、大なる神秘については殆どいふ所がない。吾人は吾々の指導者が、當代の奥深き秘密の鍵を持たない事の不安を懷き乍ら中世期の終に達する。吾人はルーターに至つて、初めて其人の眞價が十分に擱まれ

てゐるやうに思はれる人格に出遭うのである。彼の著述に對して正しき判断が下され、例の人物無視の態度を去つて語録よりも引用してゐる位である。彼はルーターが一五二五年の反亂を理解し得なかつたことを指示して、その社會的及び經濟的原因を注意して研究してある。ランプレヒトは、矢つぎ早やに五冊を刊行したる後、爰に暫らく之を中止して、其の批評家に應酬した。其の研究法の嶄新なることが、訓練なき讀者の注意を引き、彼に不相應なる名聲を與へたのである。レンツはいふ、彼が素人の賞讃を受けたとき、學者は反對せねばならなかつた。實狀と成生の區別は不合理であつた、蓋しランケは歴史的問題の發生的取扱方に於て傑出してゐたが故である。ランプレヒトはランケよりも説明する所が遙かに少なかつた、蓋し彼は獨逸史を歐洲の時局の本流に關聯させやう

と企てなかつたからである、そして彼は國民的偉人の價値を理解し得なかつた。宗教改革の卷を精査して、この時期を専門とするレンツは、各頁、否な殆ど各行は反對を起させるといひ、他の専門家達も各、其の專攻せる時期の取扱方について同様の酷評を下してゐる。ラックフェールは第十六世紀について記せる數頁の中より、誤謬の表を作り、相對照して彼が如何に他の學者の著作を剽竊せるかを明かにし、パーゼル會議の議事録の編者なるハラーは、會議の記事に於て誤謬の記事が文章の數に及ばんとしてゐるといひ、コンスタンツ會議の議事録の編者なるフィンケは、中世末期に於ける宗教の状態を寫せる記事の誤を正さんがために、一篇の小冊子を書いた。

ランプレヒトの最初の包括的なる回答は、『歴史科學に於ける新舊の傾向』(一八九六年刊行)

と題する著書の中に示されてゐる。彼はいふ、『獨逸史』を書くに當つて、優勢なる學派との衝突を來たすべきを知つてゐた。併し苟も眞面目なる歴史であつて或る知的見地を取らざるはなかつた。舊來の學派は歴史的事實をば個人的の行動、換言すれば個人心理學によつて説明した。新しき進路は社會的及經濟的發展を研究するによつて開かれた。經濟的勢力の活動を承認せるものは屢々唯物論者と認められた、それは經濟的現象は藝術や文學や哲學と對比して、『物質的』なるが故である。併し如何なる經濟的の變化と行爲であつても、知的的行爲と同じく、心理學的に制約せられてゐた。因果の法則は、社會的及び經濟的の現象に最も容易に適用さるゝ、それ故之に着手するゝのは當然であつた。人物本位の歴史は常に小説的の、そして思辨的の要素を含まねばならなかつた、蓋し昔

人は其の動因を推測し得るのみであるからである。之に反して條件本位の歴史は他日殆ど科學に近き眞理に到達するであらう。歴史の鍵は群衆心理學の中に見出さるべきである。之に次いで出でた長文のランケ論に於て、彼は敵陣に突撃した。彼はいふ、この大史學者は哲學的思慮を以て紙面を蔽ふてゐる。彼は神秘論者であつて、人文の發展は不可解なる法則に従つて行はれたと信じてゐる。然るに之れに反して完全なる因果の法則は建設され得べきである。其の第一の任務は歴史的生活の要素を分折するにある。是れ正に彼が『獨逸史』に於て企圖せる所であつた。

このライプチヒ大學教授は、多數の攻撃者を相手取つて飽く迄辯護に努めたるを以て、論戰は小冊子に於て又定期刊行物に於て、數年に亘つて行はれた。彼の最も包括的なる言明は、一

九〇四年に米國に於て試みた近代歴史科學の講演に於て見出される。彼はいふ、この論争は個人心理學と社會心理學との闘士間の争である。言葉を換へて言へば、歴史の動因を英雄に求むるものと之を條件に求むるものとの争である。ヘルダーは群衆の心理を發見し、そして主想派は其の事業を續けた。ランケと更に又プロイセン學派は個人主義的方法を復活させた。ランプレヒトの説く所に據れば、原始的獨逸は象徴的の時代であつた。そのとき想像力が強烈であつて、個人は家族と氏族の中に没脚せられてゐた。中世の初期は典型の發展を見た、故にこの時期は典型的の時代といつてもよからう。中世の末期は領域的統治と都市生活の一時期であつて、之は因習的の時代であつた。一例を示せば、都市と借地人は全く自由でなかつた、而してこの時期は、文藝復興と宗教改革を以て初まり、啓

蒙主義の時代に及んで絶頂に達したる個人主義の時代への過渡期をなしてゐる。第五の、即ち主觀的の時代は主想派の運動に初まつてゐる、そしてこの運動は理性の崇拜に對する感情の反動である。吾人は今や企業心や投機や早急と不安の念を以て特色とし、然も何等支配的の理想に感動されない神經的緊張の時期に陥んでゐる。是等の心意的階段はすべての國々に起つてゐる。今後行はるべき廣大なる仕事は、社會的及び心意的生活に及ぼす經濟的變動の作用を評價することにある。そして其等は唯一の動因ではなくとも、物質的の、隨つて社會的の進歩は一般的の進歩を來すべき主要なる刺戟となるのである。

獨逸史に再び着手したランプレヒトは、最初の五卷に對して受けた批評の影響を少しも示さなかつた。宗教改革以後の數世紀の所論は、以前

のそれに對すると同じ缺點を示してゐる。彼が興味を惹ける方面は冗長に論せられたるも、同等の又はそれ以上の重要な他の方面は、殆ど注目されなかつた。故に第六卷に於ては初期の音樂と樂器の發達に關しての長き一章があり、第七卷には藝術の詳細なる研究がある。三十年戰役に及んで幾分政治的敘述に近づいて來る。彼は自由戰役をば熱烈なる愛國心を以て記せるも、シュタインや其の同僚達については殆ど説く所がない。哲學と文學と藝術を、カントとベクトルフェンを論せる節は活氣に充ちて思想が煥發してゐる。そして第十九世紀を論せる卷は、彼が近代の世界に對して多方面の興味を有せることを十分に證據立てゝゐる。本書は一八七〇年以後の獨逸史に關する補遺三卷を以て完成してゐる。『私は自己の時代について記すことの大膽なるを知つてゐる、それは多くの人々がその部

分部分を知つて居り一部の人は私よりもよく全體を知つてゐるから。其れがために私は記さなかつた』と。必要とする所のものは精神的衝動力を洞察する事であつた。第一卷は藝術と文學と思辨を調査し、フーグナーやニーチェや其他の先覺者を論じ、ヴントをばカント以後の最大の哲學者、今後の哲學の進歩の根據となれる實驗心理學の開祖であると讚し、第二卷は必要と享樂の相對的の二個の原理を中心として經濟生活の現象を集め、交通機關の擴張、國際的信用の發展、生産と發明と工藝教育の進歩、産業及び農業の化學的應用、第四階級の發達、移民や徒黨や波蘭の勞働者や其他の問題を叙述してゐる。

第三卷は政黨の發達や外交關係や植民地や世界政策の發展を論じてゐる。本書はランブレヒトが、畢生の敵として奮闘せる政治史家に對する攻撃の記事を以て終つてゐる。『人事の發展は政

治的運命に奴隸の如く依從するものではない。政治上の自己保存は藝術と科學、宗教と法律と道德の理想的なる價値の發展によつてゐる。蓋し國民的並に世界的の傾向は其等の開發にのみ關聯してゐるが故である』と。

『獨逸史』は、之をしも效績といひ得べくば、注意を強ゆるの效績がある。こは稀有なる知力と獨創の作品である。そしてその經濟的動因を方説せること、韻律的なる心理的變體論、並に藝術と文化を方説せることは歴史の概念を擴ぐるに寄與する所があつた。但し重大なる缺點あるがために第一流の著書とはいへぬ。獨逸の文化の全般を詳細に通査することは、協同的方法によつてのみ企て能ふ所である。ランブレヒトは經濟と藝術には精通してゐたが、政治史と宗教史の學生は彼の紙面より殆ど恩恵を受けないであらう。本書は殆ど學者の役にも立たず、且

又その大膽なる概括は初學者には危険である。彼は政治史の學派に對する反動として、政治的脊骨なしのゲルマニアを見せてゐる。彼が人物を閑却せることは大なる疵である。最後に彼の抽象的なる術語と濫りに言語の結合をなせることは、本書を幾分忌はしき術學的のものとした。ライプチヒ大學が、有名なるこの教授を横目で睨んでゐたにも拘らず、彼の憧憬者は彼のために地圖類を多量に備附せる大なる史學研究所と巨額の圖書費を作るに至らしめた。歐洲の一歴史教師であつて、其の熱心と天才に對して斯かる報酬と領域を誇り得るものは他には見られない。

ランブレヒトの學說と著述が如何様に考へらるゝとも、文明史に對する人氣の加はつたのは大に彼の不撓不屈の活動の賜である。この方面に於ける最も有爲なる研究者にシュタインハツ

ゼンがある。彼は一九〇三年に『文明史紀要』を創刊した。其の叢書中最も重要な『獨逸書翰文史』は餘り知られぬ世界への有益なる遠征であつた。本書の價値は直に認識せられ、著者は中世期の獨逸書翰文の刊行に對して伯林學士院より補助を得た。ランブレヒト以來の最も抱負の大なる著述は、ブライシヒの取掛かれる近代歐羅巴の通査である。政治史の訓練を受けたるこの伯林大學教授は國境を超越することの必要と、史的生活の各方面を複寫することの必要を感じた。彼の目的とする所は細目の單なる集成や諸國に關する叢書を刊行することではなく、文明の統一ある描寫をなすにあつた。彼の言ふ所に據れば、歴史の大切なる主題と問題は、人の社會的及び道德的關係即ち個人の團體に對する關係であつた。彼は歴史の要素、即ち家族と人民と國家や、社會的及び非社會的の本能や又

行動を支配し事件を決定する所の感情の傾向に議論を進めた。歴史的調査は近代への階梯として古代及び中世史の概括を以て初まり、千五百頁を満したるも、根本的研究を主張しなかつた。目指す所の眞の仕事は第十四世紀に及んで達せられてゐる丈である。上古及び中世の卷が、ブルクハルトとニッチに献辭されてゐるのは、彼の意見の存する所をよく表現せるものといふべきである。

政治史と文明史とが、屢々不俱戴天の敵者なるかの如き觀を呈したのは、双方が餘りに狹隘なる定義を取れるがためであつた。何れも人文生活の記録と解釋とに外ならぬ終局目標に到達せんがために、共に必要であり又同じ程度に必要である。時の力は枝葉の非難を消散せしめ、相争へる兩學派間の峻烈なる嫉妬を緩和させた。一方がもはや條件を無視せざると同じく、

第三インタナショナルに就いて

加田 忠 臣

「第三インタナショナルに就いて」の一編は、近着の R. Palme Dutt: The Two Internationals. Published by the

Labour Research Department, 1920. に其の主要な材料を求め其の他英、米の労働年鑑等を参照して執筆したものである。

Marx と Engels との共產黨宣言に於ける Working men of all countries, unite! の趣旨に基つて The International Workmen's Association が設立され、各國の革命的労働運動が打つて一丸とされたのは千八百六十四年のことであつた。此團體は十二年の間の短命に終つた。それは Marx 派と Bakunin 派との抗争の結果死滅したものである。The International Workmen's Association の終息した後十二年後千八百八十九年六月十四日 Second International の第二回會議が巴里において開催されたのは、恰度佛蘭西大革命の烽火であつた Basle の攻撃が起つた時から百年の星霜を経たときであつた。さうして其の會議は三十ヶ國から四百の代表者が出席

し、各國の社會主義運動は再び國際的に連結されるやうになつた。その後 Second International の會議は Brussels (1891), Zurich (1893), London (1896), Paris (1900), Stuttgart (1907), Copenhagen (1910), Basel (1912) に於て開催されたが、千九百十四年 Vienna において開催される筈であつた會議は大戦勃發の爲めに開催を見る事が出来なかつた。大戦の勃發と共に International Socialist Bureau に會長の地位を占めたヘルギーの Emile Vandervelde は同國軍事内閣の閣員の地位を占め、從つて Bureau は Hague に移され、其事務は Camille Huysmans を秘書としてオランダ社會主義者によつて掌握されたのである。けれども當時の International は戦争の爲めに社會主義者平常の主張である國際主義を實現することが出来なかつた。多數の交戦國の社會主義黨派は自國の政府を支持して、戦